

## 自然災害に悩む 地域の人々

日本からはるか6000キロ、インドネシア第2の都市スラバヤ。ある日の早朝、町中の市場に足を運ぶと、コム、トウモロコシ、キャッサバ、サツマイモなどが、ずらりと並べられていた。近郊の村々で収穫された新鮮なものばかりだ。

この辺りは、国内随一の穀倉地帯として知られている。その源となっているのは、マランからスラバヤに向かって円を描くように流れるブランタス川。全長320キロ、日本最長の河川である信濃川に匹敵する長さだ。この大河から豊かな水の恵みもたらされ、肥沃な土壌をつくり、農産物の豊かな生産を促している。

しかし今から50年前、この一帯は、常に洪水や干ばつなどに悩まされていた。雨期になると、見る見るうちに川から水があふれて洪水が発生。また、15年に1度噴火するといわれているクルド山を含む複数の火山が、大量の噴火物を河川に流し込む。常に自然に翻弄されて生活する農民たち。手塩にかけて懸命に育てた農作物も、一瞬のうちにダメになってしまう。

しかし、ブランタス川流域の農業のポテンシャルは高く、地域のみならず、国の発展の要になることは間違いない。そこでインドネシア政府はその可能性にかけ、1950年代に入ってから開発に着手。最初に取り組んだのが、長さ1キロにわたるネヤマ・排水トンネルの建設



収穫されたもみを振り分ける少女。ブランタス川流域は、東部ジャワ州のコメ生産量の3割を占めるまでに

だった。常に冠水している状態を、トンネルを通じて排水することで解決しようと試みたのだ。

ところが工事が始まってみると、現場では、はだしの労働者が鋤や鍬を使って作業を行っていた。これではいつ完成するのか先が見えない。そこで53年、インドネシア政府の依頼でこの土地に降り立ったのが、日本の大手開発コンサルティンク企業・日本工営株式会社の久保田豊社長（当時）。彼が発した言葉は、「日本の技術があれば1年でできますよ」。それがすべての始まりだった。

5年後、現地政府の要請を受けて、日本は円借款を通じた支援に乗り出すことに。ネヤマ・排水トンネルの工事を請け負ったのは、鹿島建設株式会社。日本工営はそれ以降、50年以上にわたり、コンサルタント業務を担った。戦後、国際社会の支援を受けながら這い上がってきた日本。それ故に、日本人の技術者たちには格別な思いがあったという。インドネシア側の「国を



1973年に完成したカランカテス・ダム

# 一本の川が育んだ インドネシアの技術者魂

インドネシア・ジャワ島東部を流れるブランタス川。その流域は国内随一の穀倉地帯として知られ、経済成長も著しい。しかし50年前は、洪水や火山灰の被害に悩まされていたこの土地。ここに奇跡を起こしたのは、日本人とインドネシア人の技術者だった。

日々の変化を遂げていく町の姿に、現場の士気はより高まった。農民たちにもその恩恵は波及し、農産物の生産量が著しく増加。ブランタスの奇跡と呼ばれるほどだった。

日本工営技術本部の畑尾成道さんは、入社2年目の70年、まだ駆け出しのコンサルタントだった時代に現地に赴任した。「同年代の若い技術者たちと話をしていると、彼らの国の発展にける熱意は相当なもので刺激を受けました。私の仕事人生の原点にもなっています」と振り返る。目標達成のために努力を惜しまないこと、そのために全員が一致団結して前に進んでいくこと。ブランタス流域開発に携わった技術者たちに育まれたこの精神から、ブランタス・スピリッツという言葉が生まれた。一時は150人にも及んだ日本人関係者は、70年代後半には10人までに縮小。現地主体で工事が進められるようになっていった。

90年代には、当初のマスタープランで設定された事業はほぼ終了。流域では洪水がほとんどなくなり、灌漑施設により給水が、発電所により電力の供給が安定した。その後、現地の技術者の中には、官公庁の要職に就いた人もいれば、コンサルティング会社や建設会社を立ち上げた人もいる。ブランタス・スクールから、多くの生徒たちが羽ばたき活躍している。日本の国際協力の根幹をなす「人づくり」。それは50年前から変わらない。ブランタス川で育まれた技術者の魂が今、インドネシア全土の開発で生かされている。

■ブランタス川流域開発の主なJICA事業



洪水が起こるたびに水浸しになっていた1960年代のブランタス川流域の町



カリコト・ダムの排水トンネルが貫通し、喜ぶインドネシア人の技術者たち

発展させたい」という熱意も重なり、工事は1年余りで完了した。さらに61年、JICAの支援で「ブランタス川流域総合開発計画」を策定。1万2000平方キロに対する流域開発のマスタープランを日本工営が描いた。ダムの建設、灌漑施設、発電所の整備……。やることは山積みだったが、両国の技術者たちが発する熱気に包まれ、マランに設置された統括事務所や現場はいつも活気にあふれていた。

## 技術者を支えた ブランタス・スピリッツ

60年代に新たに円借款で2つのダムの建設が開始され、日本工営が設計・工事監理を、鹿島建設が施工方法の指導を担当した。しかし事業が軌道に乗り始めた65年、インドネシア史上に残る大規模なクーデターが起こる。9・30事件。首都を中心に混乱が生じ、多くの外国人が国を離れることを余儀なくされた。しかし今ここから離れてしまっただけで、これまでやってきたことがすべて水の泡になってしまう。約50人の日本工営と鹿島建設の関係者は、その場にとどまることを決めた。統括事務所のスルヨノ総裁（当時）は「日本人の技術者たちは、私たちとともに本来によく働いてくれた。現地のものを食べ、インドネシア語を勉強し、懸命にコミュニケーションに努めてくれたのです」と評価する。

70年代に入り、流域にはダムが完成し、発電所ができ、灌漑施設が整備されてい



カランカテス・ダムの現場事務所にて久保田社長（中央）と日本人駐在員と家族